安言抄
伊地知文庫
文庫20
217
3

文庫20
217
3

三 四季詞

四季ともに花鳥風月雪ホ
乃あまたのながめそのまゝうつれる
地ハ不入但霞霧をハ一ツ
まとめうたふ
歌しるしあとゝもの秋ハ伊ろ
ものハ上まで伊ろ初冬ら
ゆゑ面白ハ注し尺分やすく
たゞよふ

春 ハ部ハ海也ハ面ニ居ル紙と

歌し景色をよ

きゆへよ屠蘇白散元旦
服し
ゆり天のへ供し
そのむつまくこのより一家飲
之一里うくすりみ葉を供し
せ痛そくくすりみ葉を供し
そてまいろみ
不孫と用とるみ女ゆりいまさ
ひの
氷様 同元日あさ
ふ命也水乃
きめしまいり 腰赤靴買
元日のそうひやうて
いひくひ
みしう九州肥後國宇土郡
長濱よりくそ
臭のう景行天皇乃行幸
節ふうを供
乃沙宮にまり

[illegible]
白馬節会 正月七日あさ天
仏説すり井也
まくしたら
若葉 そ
ふくさむ
磯菜摘 ま
けふ
とのう

せり葉 ほ
ふ日 雑也
卯杖 小松
日也

下

三ら儀式あり
そうまう浮流しともいふ
縣召 四月十一日外官除目あり
田舎をわろくいふ
四月十四日又目六日天武天皇ともに
踏哥とうたふ也
さてまう時の
時の 淨衣 新 四月十八日 賭弓 四月十八日 射をもよほす
松乃花 初夏
松の緑 乃綿 北衣歟 踏哥乃

柳 雪を 花をもよほして 柳 雪 花 雪 雪 雪 雪
氷乃ひ 氷 氷 氷
のこる氷 氷
雪ふる雪 雪 雪

當代を過ぐる佐保姫
弥猛る
あるす 霞乃洞院乃御
春乃宮へのぼりたまふ
彩雲祭 二月廿日
二月上申日也十一月もまつる
あり女房の祭ハ初午ハ
ゆへなり 大原野 二月
まつる 春日祭
日まつり 佛名
南祭 春清涼殿の
三月中辰の日まつり
天暦の年より 曲水宴乃
まつる 鶯
三日まつり 鶯も
すむ也 元日
暁乃ほとゝぎす
まつる 百千鳥
まつる鳥也千鳥
も春乃
白滝乃鶯 滝を
とゝいふ 鶯のさえ
羽をふくむ也 鳴鳥
きゝなし

鴻乃鳥の声鳴
乃鳥ハ勿論
鳧乃たゝ
鳧鳥

やれ　若歟　そく　歟ハ勿論
若和布　夏のり
ホノ歟　や　若むらさき
そもじ　そうろう　草ゐ葉
うろ　ハ歟　草ゐ葉は　篤ゐとうは
本のごとう葉
なるより
なく　秋夏の
ごとう葉とすれハみみなり
すく　論ずすき　簀ゐ
角ぐむ　ひこばへ　勿論
すられ　ひろの歟　萌く
まもられ　歟草く　かり　ゐれ
を　迫すうろ
をよそれ

草　横ゐ　ゐ　の
歟いはまも
まもり
小田久へ　たり
ゐ　月の
歟
あ　あ　あ　ゐ　読
たる　東風
まもり　の風
あ　ゐ　風
おみな　離也　ゐ　風
もの　離儀　ゐ
著也
月也　月
己の月
あ　鷹

しうけ
せすれいまも
いつり
鳥の
きれる
鳥のう
ろ
利
文
さう
菊
なり
心の
すう
楊
又
楊
う
楊
遅
そう

夏

大祓まうす 四月上卯日也
犢鼻まうす 二月卯日
平野祭 四月上申日仁王会
松尾祭 四月中酉日
賀茂祭 四月中酉日
賀茂祭 四月中酉日
灌仏 四月八日也
山と他り仲の
日よりまうす 四月中の申の日

賀茂祭 四月中酉日也
賀茂祭 四月中酉日也
あふひ 葵ともいふ
挿頭 四月中酉日也
排取 又作榊
榊葉 若葉ともいふ
榊 榊ともいふ
花 卯花ともいふ
郭公 夏鳥

菖蒲 水もあまりうごかぬ六府あやめなどいふものゝやうにそれもあまりふかからずあやめのやうなるものなり

菰 まこもともいふ水邊にあり葉はあやめに似て長し

菅 すげともいふ水邊にあり葉はあやめに似て長し

蓮葉 はすともいふ池に植ゆ

萍 うきくさともいふ水上に浮ぶ

蓮 はすともいふ池に植ゆ

花 はなともいふ

實 みともいふ

根 ねともいふ

藕 はすのねともいふ

莖 くきともいふ

葉 はともいふ

蓮葉 はすのはともいふ

蓮花 はすのはなともいふ

蓮實 はすのみともいふ

蓮根 はすのねともいふ

蓮莖 はすのくきともいふ

蓮葉 はすのはともいふ

荷葉 はすのはともいふ

荷花 はすのはなともいふ

荷實 はすのみともいふ

荷根 はすのねともいふ

荷莖 はすのくきともいふ

荷葉 はすのはともいふ

芰 ひしともいふ

菱 ひしともいふ

芰實 ひしのみともいふ

菱實 ひしのみともいふ

芰葉 ひしのはともいふ

菱葉 ひしのはともいふ

鳥 とりともいふ

鳥巢 とりのすともいふ

鳥屋 とりやともいふ

鷹 たかともいふ

水鷄 くひなともいふ 水ぐるまともいふ

鵜川 うかはともいふ 鵜飼ともいふ

江河 えかはともいふ 魚のおほくすめるところをいふべきや

獵狩 かりともいふ

鮎 あゆともいふ

鮭 さけともいふ

鹿 しかともいふ

鼻 はなともいふ

眞梁 やなともいふ

…ぐさ　はくさあさ
…日多　鶏頭　鶏冠の草　葉もとも
…しては　すべて　名は夏の草
蓮　みな夏の花　葉も夏の物
…はま草　水草　ゆりなどのやうなれ　訛
ねぶか　ゆりの類　葉も夏の物
杜若　菖蒲　葵　布留川は
石乃竹　名
夏草　ほこま　同　くさまこも
…ふは　藻乃花　草

…同　くさなり　草
花　日水草
乃花
いひくさ　田草
なまり　まんぐさ　萬
花　くさ　むくの
…花　海松　草
…ぬなは
…若竹
夏也　竹の葉
葉ハ雑　梅雨　辺夏
さうめん　夕立　雨
雲乃峯　汗　黴風
…夢乃通ひ路　氷室

の雪をも夏のうちにかきあつめてはるをへたるを
はつ氷とてけふの朝にもちゐるなり
醴酒 六月一日也 七日也 祇園会 六月 八坂の
素盞嗚尊 をはします 祇園の社をいふ
涼 とて氷をもちゐるなり
清水 八坂の下也 泉殿 清水寺の
鎮守也 露地 なり
夏也 暑 理なり 暑 熱 なり
明石 八月 十五夜 月 名所 なり
こもの 菰 つゝみ 包 なり
御祓 六月 晦日也 祓 なり
茅の輪 とて 茅 にて 輪 をつくりて
百官 来 集 て
祓

一葉ちる　一葉衣たく一葉とも
柳ちる　柳ちるも初秋のうち
　この也　初秋也又柳桐をまちらうそむう
桐ちる　桐乃ちるを落ると
　そう秋よめり　秋のうち
星合の夜　行事も秋のうち
　前に不及　初嵐
扇をすつ　扇を恵　秋暑
　なう也へうと仕る辞うへ
　うへ　ぬそうへすう
　いう　天川　舟うとしすひ
　ハ初秋也雑也　秋の別にあり
　なう也へう廿日あり　雑也
　あうて勿論秋也　今日乞巧奠　星をまつる
　うとうちとけて夜ふけ乃ち天川を隔て
　天平勝宝七年七月七日
　そうとまうす
乞巧奠
　乃いかを
　糸
　手向する事あり　糸ひ
　年のうちに
　七月の事也　糸ひんとうとの竹うへ
　糸をうけてうつ
盂蘭盆　盂蘭盆　七夕の翌日あり
おし鴛　初冬ともひ　鳥屋
　てもあり
初鳥狩　小春もあり　鶫

このりのとの新小菅 **鶴**
みか牡のり
鶴という字へ
何なり成へし
八句海辺小島
のり
牡のり小島と
詞つゞけとりつゞけ小焼あり

亀島 亀のこと
多きの事なり

鶫の草堂 江戸よし
九いのり **鶫**

衣 きぬ
北出歌とり紀衣の事なり
ゆへなり
二句嫌へし
牡のり雑なり
たゝの句作
みさ山桑 七月廿七日のり
山のもゝ時の事

りやうかなし山桑 山桑のり
すまりやのもゝ也

相撲 七月吹
也扱出同
年中行事
多細あり
八月廿日
のり 小野桑

薄戸 同
捲ら
清涼殿の
の前の
のこと

笆籬 蓋同
とかに
よる牡のり
せゝのり
行まて牡のり
不二の勝斗
すゝきの
牡のり

龍田姫

葛 つた

蘭 ふぢばかま
女郎花か
に不似歌し千時と
もそれの牡之草
なり

濱萩 おなし

水乳まじる雅也 ―水うけ草

―の章 ―宇治の花園。

生殺 八幡の 紫式部

そくひ作業八雅也むすこたの

文源さうし てもおはる

さうし 八月十五日の事

おなして用ゐる

作濃の勅使の駒牽し儀式内

おみな八月十五日

さうしの駒 かうし

甲斐駒牽 八月十七日

武蔵駒牽

上野駒牽 八月廿五日

月の桂 月の都 みやこ人

月の光 桂の花 桂の花

月日 と作る 但月日とも

日のくま 日のくまなき月

日のくまなき月 日のくまなき月

星月夜 月のやうへ

盃の光 月のやうに

中作る 月の影

…ふらくは杜也 有名うらねとも云
心とゝ多附日の事也杜に
あれいれ杜也 珍鳥

たの雲の鴈 田う七ゟ
鴈うの鳥 杜うり 嬉うり

鴈 杜うり

猶う鴈 杜うり 一面不潤みつにのこ
…ゝ心うり 鴈のおう心うと
…ゝ杜うり 暗 いも
…きゝ云引も 杜うり

秋 杜うり
…杜也

鴛鴨ふう

推 杜やうり おもれ杜やう
…ゝ統不論ゝ 杜うり

推しまも杜也

机 おとれうり

推 杜也

…ゝ円 杜也

忘乃こ 勿論杜う 杜うり

梨 實ハ杜也 花ハ杜うり
杜や拍とうり
ハ雑うり

拍うちゝに

打 杜うり
…杜うり

杜うり 拔すゝ杜うり
う成処

杜の宮 …ハ月十一日ゟ
…ゝ杜也 …ハ月十一日ゟ
…ゝ杜也

…ゝ杜也 津うゝし

…ゝ杜也 筆禿

…ゝ杜也 …ゝ宮乃御杜

やまとうた

鹿の妻こふる時に鳴くと云ふ也

鹿の妻こふる時に鳴くと云ふ也

萩 秋の始めよりさきそめて冬の末まで花ありて秋を専らとす

萩 秋の始めよりさきそめて冬の末まで花ありて秋を専らとす

秋風 秋の始めより吹き出でて冬の末まで吹くなり

秋風 秋の始めより吹き出でて冬の末まで吹くなり

汐燈 秋の始めより冬の末まで

汐燈 秋の始めより冬の末まで

九月三日の夕

九月三日の夕

重陽宴 菊花

重陽宴 菊花

残菊 秋の末

残菊 秋の末

九月十日也伊勢の海乃波のうへにて

九月十日也伊勢の海乃波のうへにて

月前露 露ある夜の月をもいふなり

月前露 露ある夜の月をもいふなり

枯野 冬のうへ

枯野 冬のうへ

野山の色 秋の末

野山の色 秋の末

霜の朝 霜ある朝をも云

霜の朝 霜ある朝をも云

悪筆 秋也

悪筆 秋也

霜の鹿

霜の鹿

小田刈る 秋也

小田刈る 秋也

消息 秋の末

消息 秋の末

冬

十月更衣　朝日也　文乃衣
わた入初むる　なり　同　右也
初霜　冬也　秀句
霜ふりて　はをれ　陸奥
霜ふりて　はをれ　仕二る
霜ふりて　はをれ　なり
陽春　十月　六月也
孟冬宴　陽春宴
同月　紅葉のちりて　おそ
ちる　なり
ちる　冬也　同
紅葉　ちる　冬也
紅葉　ちる　歌　文　也
紅葉　ちる　ハ　冬也

ちる　山　なり　同　右也
ちる　ハ　なり　同
ちる　ハ　なり　同
ちる　ハ　なり　同

まつの葉　まつ
葉衣　松ふく風　松柳
ふくハ冬也
紅葉のちるも相ひ
ちくも是冬也
名簿　ふるき
の松をもひ
ふるき
名もをしまれ
これ枕の部ふるき入約り
ふる葉乃落
ふるハ替ゆへ
月ゆ冷ゆ
月乃霜　冬陰也　霜乃
霜ゆ冷ゆ也　物雪景ニ
桓武天皇延暦年中ゟ
ふる霜乃ふる
霰ゆふるふる
ふれ雪ふる
ふる同前　波の雪
ふる雪　露のふる
霙　露のふる雪　ふる用也
ふるハ冬也

薄氷 うすらひ
ゆるみ氷る 氷も同じ
とくてもみぞれ
新雪 雪なり
とよみ 鳴
節会 七日
雪の名也 とよのみそ 大雪
きこしめす 禁裏乃仙事 乗輿
あふとさす 扇
むらさき地也 寛平九年霜月中酉日
日蔭糸 苔
小忌衣 神山あ
しらゆふ 楮也
紙の袖も同じ
乃うら地也 袋
みの 大雪の節のもひ人
用地なり 黒 赤
冬なり大裏乃外
赤 赤
掛そうみ 雁
みお雑也 奥
求 みなの名也

あるをあるひは
逆矢　矢をさかさまにつがひ
ひくをいふ
鴛鴦　をしどりをいふ
寒鴛狩　冬のかりをいふ
雉　きじをいふ
雁　かりをいふ
鴨　かもをいふ
千鳥　ちどりをいふ

網代　あじろをいふ
氷魚　ひをを
狩場　かりばの
野　のをいふ
鷹　たかをいふ
きぬ　きぬをいふ
あられもち　あられをもちひ

うはつ矢　四季
会衣　四季
綿　四季
閑白所行幸楽　十二月十日
のさたのことくなることよりの
時行前使　十二月十二日
佛名　十二月十九日より
三日の間也佛名をもちひる日
なり
年末の歌
年
ゆく年
ことしをこれ
みふみをり
春
春をまつ
年

節折 十二月晦日のよ
なものありて天子の
まくの儀ありてまろうど
ゆへう脱ぐ
僧名 同月やうふつ
桃のつゝ節
鬼とりて
年の内に立春 冬
行ふ鬼やらひ
詠あり

○ 桃季 同
り来向ふ
山路う歩

諏訪祭 一ら名う七十五度
榊 賢也 榊う改う新也
と訛
発源の宮 帳抽也 発原
き道 拍楽のう
源しき
清のうとめ
なし
黄泉の
年也
月日七
天のう

雜

雜ありこれ

雜ありこれ

雜ありこれ

木の葉ㇾ里
亦ㇾ落ㇾ
山梭 笈の小文 ㇾ
簿 蓬 浜荻 ㇾ
紫 ㇾ
巨掌 ㇾ
いひまて 嵐 ㇾ
笑ㇾて ㇾ
聖の ㇾ

波の也 白の春 ㇾ
野遊 ㇾ
志賀ㇾ山 ㇾ

霞の関 笈の小文 ㇾ
多賀の ㇾ
氷ㇾ ㇾ
あるよ ㇾ
同前 鴫 ㇾ

鶴の巣籠 むさし 雛
鳥 同 雛
の 巣
けうそう 雛
ものふ
蘭そう 行基 雛
る麻 園の 雛
猪 狐 雛の獣
頬の雪

扇の露 雛
雛
大綱 雛
五 弥紙 かう 雛の
天晴 やたのかう
真坂樹

永山　野宮　鵜の
羽ぐち　きぬかつぎ
板机　火燈屋　大内うち
延文　いろは
あのひとくの巓
ふもとへのぼりたまふ
小忌衣の歌
東遊
来み　しもとの歌
いもね　ものも
みへ　神楽歌

況永樂うつし絵事
韓非　木流
前帳　こゝろひとの歌ゝ
知ぬし　六　釋教　彼岡明かむとし
鷲峯　鷲の子
我立私　鷲林
宝乃戸　彼岸
家を出
三世　三車
真暁

一夏こもり
むこの人の雲
衣も　山伏　学生
別　六道
心月　櫳（しゃこ）　二尊
釈教の
小乗経
小乗釈教の
なと別
七　迷懐
迷代一向迷懐の
加持

昔　古　老死
世　親
墨染袖
修行　憂　身　命
岩衣
隠家

命なるかも成田へ参詣のうち
十二の年に　白髪
我黒ひかりけゆく
なくの
鏡の影
嗚呼うつろひ
ハ釈教やとこゝに云り

古今道

八　衰傷

寝乃谷
山ハ高し　塩干山
なるらん

かへらよ道
髪衣の　母を名乃橋
ふらゝ雨のふるさと
なりのゝ迷
古今哀　あやの
忘のなうなるらん迷惑のうき迷惑
迷惑のうれしきもうき迷惑のうきも
うき迷惑のうきもうれしきもうき
ハ哀傷なりけり

古抄

九　山顛　峯谷の
不及触くし
山姫　山人　仙人ハ山姫よ
あるべき

やまよ爲 歟
ゝの 山利木
歟 山
ゝ白川木の
事ゝり
伯濃寺 雅在山閑山歟ゝ
ゝ
あゝそ
伯濃乃鐘 山歟ゝ宗祇
あゝとあり 抔ゝ山歟ゝ
今ゝりかの
意乃山 依白不一爲木而
ゝりゝ
あゝて山歟ゝ
ゝ仕ゝ
おゝ猟業の
へゝゝ地
淺嶋 ハ山歟や
歟ゝ
杜鵑 名也淺嶋ゝ原ハ山
地也
筥根乃岩橋 斗ハ山歟
ゝ
水鳥 月
あ
地山
歟
筥根ゝ山歟
ゝ
ゝ
富士
筥根歟斗ハ
ゝ
ゝ
ゝ

家かさ　此二歌ハ
瀧　瀧津とはの事
此歌うたひ
駿河　清水
此の字
なし
雪丸山
こゝ迄の山ゝ
唯雪のみ
なり
此歌也又源氏う
乃おもへう雪の
山歌う此を白
なりへし
相　山歌
津
かひ
なり

此歌ハ山
同ふ
雪山　天竺大雪
あれハ山歌
為
ようう
鷲峯　此山歌
なり
山のようハ
勿論なる
仙人　山の
同ふ
山科乃宮
立田のかく
う此を
富士河
田養乃鳴

新　素木　玉椿　附
未の二句まで山数うある事

十　水鳥　猿　この歌ハ除之
　　毎号此の歌ハ除之

恒吉の非　水亀あり
う　姫　地うの
敷生　非紙あり生のやうに
あ　二句
雨仏　う　ま　ま　ま

三嶋 称州の三嶋也

浦きよ嶋 志賀の一松

なとゝいひ初也 水辺也

松嶋 歌枕 水辺

河橋 水辺也

泊 舟なとゝまりぬる

浪の花 水雑

田井 手洗の水なとゝいひ

水辺也

千鳥 水辺也

水辺也

汀の篤 蒲 水辺也

立浪 海なる

十一体用之事

峯 高山類体之分

恩 洞

森 坂

浅岡 篤 塚 体男の分

[illegible]

[illegible]

[illegible]

淡　手洗水　閼伽桶
清水　なくても用也
体用ともに外
浮木　船　流灰屋
垣繞　もの數垣　土才若
菖蒲　葦　蓮
真簀　海松　水布
藻垣草　浮　海人
奥綱　釣　筌　覓
下捕　筏　千鳥

水鳥乃類　水とり云ともみな用乃物也
すべて体用乃物あり

居所体之部

軒　廂　窓　門
戸　樞　蔀　壁
垣　竹ノ上体也　隣

用之部

庭　外面　筵　簾　関屋の居所
二百餘りの内体ばかり不出関の
抜ひさかれども二百餘
あり　又　いろ〳〵寺家を出

望非樂所以上若不
あるなり

雜物体用之事

假令まろき物と
又打ち久しきと
二重用なる物と
付やし是体なる物へ
う折ると付て又
長しといふ物へ
短と付へし又
くひくるしき
あり此上ある
裏受所阮仍
折あり打ち
短き紙用あり
迷ふ事なり

數おほの外いろ〳〵
あり是をも二色つゝ

又いろ〳〵
拵ゆ

十二 天地人の隔三色物

月日星 雨露
霜雪 霰霙
霧霧 雲煙

草地 草と草 草と萱 草と茅 草と萩 草と葛 草と藤 草と蔦 草と蘿 草と蔓 草と蔭 草と蔕 草と蔵 草と蔽 草と蔑 草と蔚 草と蔦 草と蔓 草と蔭 草と蔕 草と蔵 草と蔽 草と蔑 草と蔚

鳥 鳥と獣 鳥と獣 鳥と獣

服白 きる 煙也 敎ゐうそ名
所ゟ又おわまハ狩ゐうれうそひ
又ハ所古ゐ事そくゐーうひ
雪用苑赤乃村節くんゐ教
白ゐうゐゐゐやうにすへし
ゐうらんやめれこの祈服る
ゐ赤郷谷を山ゐのやう成
みまそて志ゐ个し高世大可
ゐそとゐくれみへうす
労三 ゐ平流め紀
服のんとくまれ一位くま
ーく仕立ゐうり上そめへ
そ八文字ゐ附そうそてやゐう
まもありたく普通そは
てやまらんやまりうう
へ成う

白め 此すへ
ハ西の通ゐ附
ゐうみうくすて

郭公 志位称の白い不苦也
ゐとゐ字も称ゐく
ゐうめり

世乃字紫式部
すゐ 迷惑ゐうき
ーく

鄭玄 ゐ
ハ女ゐ男とゐ姓ありと赤苦
云り

老ゐうそ
やゐうハ
ゐ目とゐ
ゐり

源等生活

なく云河十句のうち不一ならん
山数を際限ゆへ器し
森 とこゝろうとくなく付まわし二るわ
会くる不ふ成
ゆへあり
同 うかうやまわれと同意いつ
里のうちも山数有ん
十るのうちの廿ふ益
りのあり
室塔式養 尊宿なく
養自なくあり て経教の
くと云院あり 眠う経教い
自みひいあひ 不可 紙地経紙うひ
みくかくんう
経紙し養自 ハ毎度ある
必眠うる経紙
かくり

名沼の養自 脇うゝ名茶
去れくゝ久智のう
くなくしかくひ
通善 養備茶ふ経教通懐ゝ明
脇経教おの自形
但時宜うくし
常乃云 常ハ
懐懐明養備茶ふ経教通
ふくうのうにおの
のうにふくうゝ
列蓮生薄生
うまくたる中地想
きくうまを
自のうくハ
二も不告他准う

打 のくこれ
この如う義
二自煉てふをう
をいくれくまあう

同字 雨ハ白ク降リ九白
十白ノ如シ
雨ノ連歌 雨ハ白ク降リ物隔テヌ体
猶言ノ海 白ハ白ク降リ一向ニ白キ 連歌ノ雨
ニモ此ノ如シ
薫 又紅葉ナド付テ
十六 時雨之雨
非通之雨
電雷 雷ハ白ク鳴リ音ヲ付テ
夢 夢ハ白ク見エ又ハ

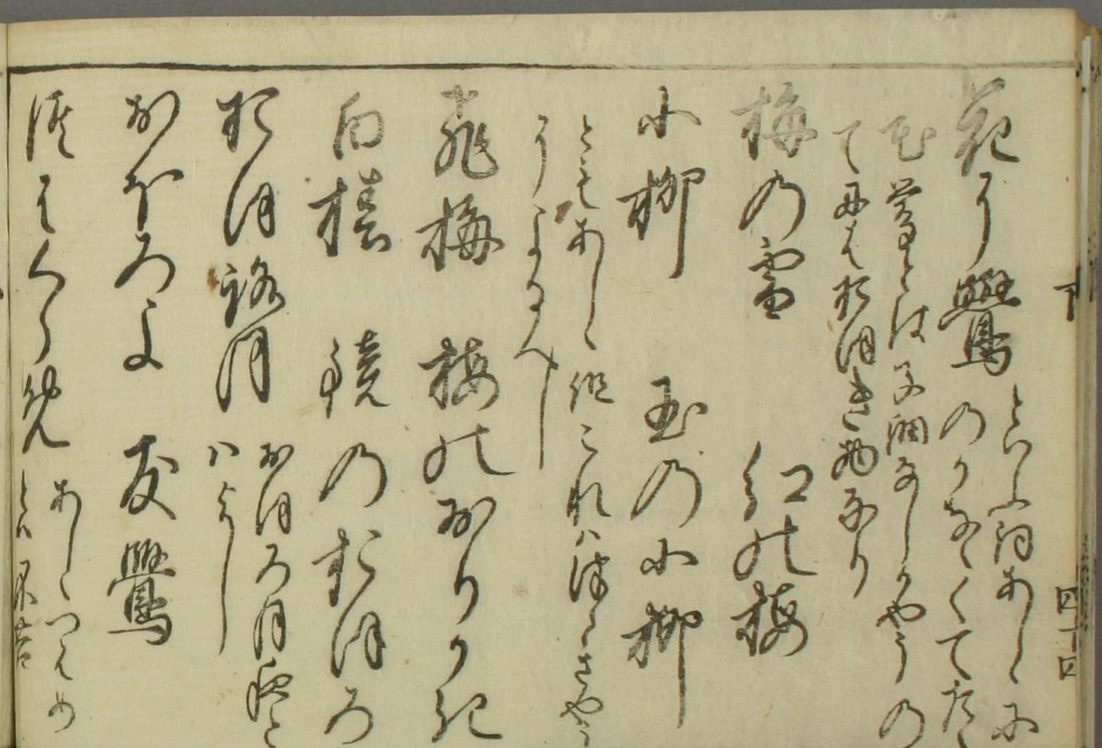
十七　嫩綠

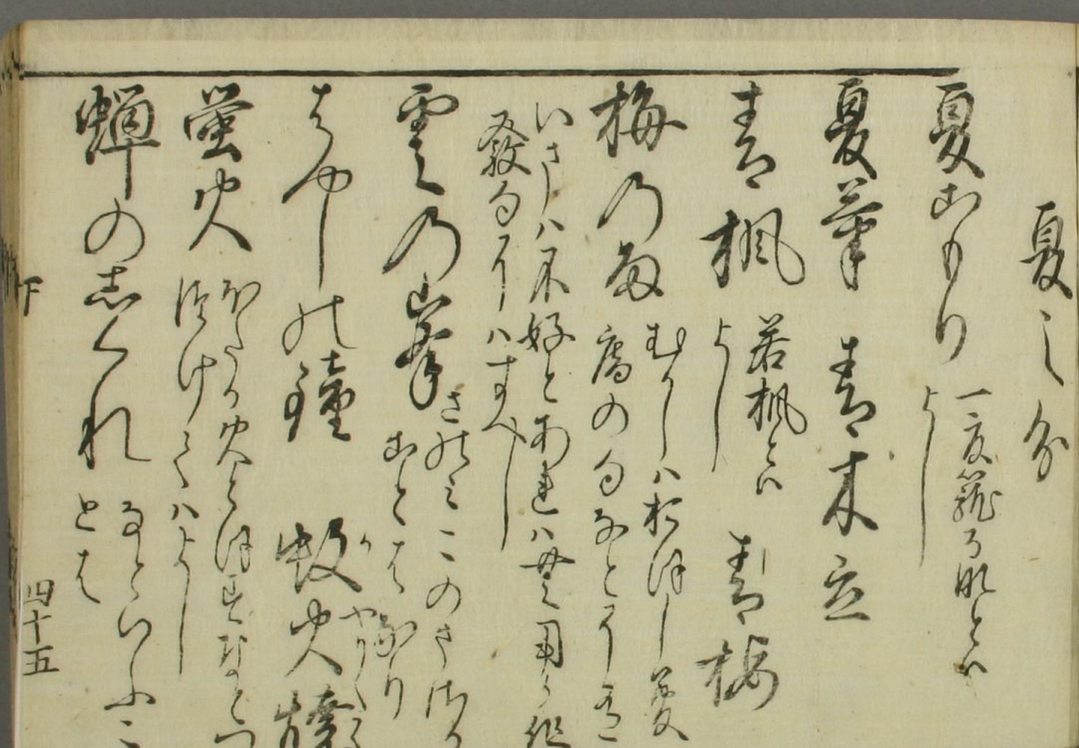
春之部

春船　春門　苑の

門つ

梅未　遊梅　うそ梅





物河 後歌の部立てう一首有とそうとふあく
雲 ものうち すると
秋ひうり もうひ
うへ四 他旬のうへ
和門 歌のいうへ
雁くへ
雁 麻 萩の
萩 風 雫
うへ菊 菊を
他准 雁 菊華
やへ 雁くへ

有明 雁
明 雁 四
なへ四 四
遠田 雁
鹿 雁
うへ衣 他
連紅葉
紅葉
冬
秋 雁
冬 風 冬

冬枯の道
冬梅 冬籠
鷲場
秋河
山しぐれ
源実朝 大雪
寒路 霜
憩し

水邊之多
水音 水のおと 水ぎわのこと
水田 みづた
漁家 あさりするいへ
漁火 いさりび
漁舟 あさりぶね
漁父 あさりするをとこ
漁婦 あさりするをんな
漁網 あみ
漁具 あさりするどうぐ
漁船 あさりぶね
漁人 あさりするひと
漁村 あさりするむら
漁舍 あさりするいへ

雛之夕

秋かぜや秋風いろの
秋の雲
秋すずし秋衣をく
うす物を
うす紙を
うす雪や市鳶
うす氷波鴨鳥かもの村鳥なくや
うす霜や小ぶりの駒

野風 仮名かぜ
野雲
家〇雲風
遠雲 雲を雪
小雨は
雨なれ

人雲や世をすてて雲
朝顔
夕顔や神明うちを
神明の戸
世をすて人
人をすて人
捨人 人を
捨人 人を
すてゝみを捨て

賜のめ

衣ろも
年ふりぬうつかくた
勿御有網るれたるもろ
うつろみは八国挙の遠近
老らく 仰若らくた人ゆくそり
動れ人 うとすこ衣 うとすこ
終
歌曲 いはひおひそく
なくる 鶴丸音 るのとを
河
笠丸を 雲うを 袖
つもなくる れるろ

業ろり 蝶ろり
なりひて いくそひみりひ
年くる有て 知れゆふるもれ
弁の折ろ 知行のふる
通用挙の
そあり

夕雲 道すろ
乙ふる ろやこうさ
ろれ史 ろのことは
行の指 阿もあれ
うた雲 そくはう
河あま そ ことたせそ
三ふろ ことはふ

志波之入相の道のへ

十八番

儒道神歌道

雪へ　鴛鴦

衲鷹

鳥

海士樵夫

春夏

けり　と連歌ハ言ふもさらなり一ふしもこゝろに
なりてするゆへうまれよきうまれあしきなどいふ
ことハ
哀傷乃歌　詞書ハ心のこゝろえなくこゝろ
苔の下又歌あるべし　ミ略すべし
昧の道ゝりなどいふこゝろえなくこゝろ
体又厚風九帳なくこゝろえなくこゝろ
ていふ歟又書ろはゝへてなど
云并閑お人若輩ろうのつれ
を不加ろそゝろ
ゆうにやさしく
面ろへ

老後乃
又幼サちろ時の心地乃ろいふ
すゝめられせいの
少へも来ろそゝろ
ろくこゝろえなくこゝろ

哀傷

古今集 新古今撰ばれ

同意之事

假令家元死亡之節

この儀もこれまでせ

十九

二乃二句体もうつきぬ
とも也み同し
人いまうひて
ものさうり
なくくうり
句つゝみすり
り七ゝ
一ゝ二ゝ
すゝうり
うりて
也書
り

二十 句数之事

春雑発句ハ
よりの句ゟ
句の句ニ
へうり

夏冬雑発句ハ
殺ハ一句ゟ
うり三句
速懐し
ゟ旧ゝ常

山顔水態遍在不尽

引合て三句ゟ
一句ゟ
ゟ
ゟ
ゟ

人倫

三百いくつ〳〵そ〳〵
うつる人倫い二百をあり
うつの
植物 二百はまくうつ
くへうつて宗旨 家長
牡丹花園の山うてのこ吟
う植物三百あるありのばすへ
男やうれゆへうそのま
そしてみ〳〵うつ
成へうし元亀うつ
おそのこうかくうさ
品函のおうりてもくうかくまりの
牛顔うりてもニ百ようあい
のあひさ三百をうり

吹一本奇

如方のうニ百ようさ
本統物統同〳〵
あ〳〵〳〵
月うう
うんうかる駒の
なりのう駒の
て又君み〳〵
やいかおにあ
あうううけえ
うんうう月の
の宮のいそうう
立知うきうう
そうて行うやう
永見えのそうう
三島あいけ〳〵
一ううみりうみ
うう大え人の
強い郷もて

廿二　批筆之事

一 うの流人ホ
題
二 うの不淨訳
心 う位をヤ
三 うの二を序
ホ とりあり
ぴの扨今を
やうすヤ
五 ハ雪月をの
と ヤ
六 ハ宗通せく
志 とうヤ
七 ハ落元扱露
の相違 とうの
八 ハ摺紙面を
ヤ
九 ハ五步三摑
こんを ヤ
十 の注度訳漏
とう

ひ条く訳
みくよへう十笑
りくくよへう連
のくくふたくり
すへくれる注
白ひあひくそ
へうしすくく
たをくひくく
すれい引ゐ
わりま人ゐ人
ヨてきわひ
うれうう有
無なうハ女
そくよ真の
わん何のう
人のいくん何
みすくやくて
うけくてく
そのゆくう
み何豆はなう

美能弁一
定明左経
必通称而

裏九一順 面の一順再等の

吹血　和漢篇

大概は前の風邪と和漢を以て治す。但し前項の風邪と同じく頻数の為限なき為に漢方にて治すべし。

通用の方　和漢篇

色い衣う混乱し大うきな
なう歌う衣敷う二句略へ

一 鶉衣敷うくさらよ衣敷う今寸 衣の戀い慈 一切う
よへ

霜踏ハ馬 栗う
為隊抱句欲 唐う
鞍ハ稽 句略へ

一塵一句物

詩累し類 連歌く新
敷く 此句ふ本ハ

洞庭ふ章 兎狐

ふの多 花抱句略
あり

二句抱 ふし有
ハ不及敷 紅風 ふし有 紀氏貫
し

紫 紫ふ柳 替折う
留し

紫ハ多う
留ぬ

坂谷 鳴 海江
堤 溝 礒 沼
三句抱 う替折

紅葉 文の類 彩
ふ

月の
宮

宮殿ろう
狭紙ろう又
二ともあれども名本のごとく
一つにせり

四白地ろう詞折

氷雪 いつれを
迷うの
みて作るべし 名本の

立白物 一六面をえ可
ろくろく

世拙

春新

新正 歳の首月也

淑氣 まの名
体あり

管律黄帝作律とくし

貢榮 まの名あり

繁 柳の多也
花の心
あり

贈 まの草をみやげ
ろう

菁簡 若菜也

燒痕 狭の燒原をとのん
あり

鶺鴒 まの名あり 山梨 ふの
訛也

蜂 ち依白神教

夏部

秋線 秋掛同
七月の
霖
萱梅 梅のごとし
黄菊 黄梅同
白菊 白の類
おくてなり
晩菊
秋深き
頃
金風 秋涼同
蕭風
ひつじの風也

殊勝

殘暑 秋ながら同
金氣 秋い令の
変 秋のきざし
懸鶉 衣のごとし
黄柳 秋の柳
蓋 蓋
帽子
九月九日
辛扇
勿忘草 秋

冬部

凍柳 冬の柳
凍蝶 冬
枯草

生拍子 ひょうし
探梅 梅の花を探る 早春梅の咲くころ
玄信 玄信来たるごとく
雪巌 爆布 爆布 驚鬼
なごり 離れ名残りの声
なごり

山軒

雪山 天竜大雪山八幡山麓
但雪の降る山八幡山麓
岫 山
巖竈 山麓にある炭焼き小屋

水邊
潮境 しおさかい 只潮の境目
水曲 入り江

一絃 琴
約 約束
現地 目前に出現されること
釋教 禅 座禅
揚 揚杖
祖師の名 定 入定
僧 僧侶

未擬
名利 名と思利と也
棄世のこと也
兼訳 白顋 浮誄
物名 隠 先
疎業 逃 退
憲詠
得 この字詩 杜律
閑愚 冲漠柴
暁転 徙業 義人

別字 但兄ハ白イ
鴛鴦 鴛鴦の事
古報 報答
昭陽人 楊貴妃
たとへ名ありても文治百首ノ入註非
報詠
信 書作四字 寄
寄振ありても
夢ノ一葉 夢
遠山

漂泊 船の心より 征人
布山 功名 より依白斬
人倫
云侯伯子男 空是
又本の訛候
より
吟士 妙
吟二人倫より人の名へ人倫
より
帝王 祖師 名
杜翁 本支 姓 空
人倫 より
文体
文

頻繁 数 より
生殖
梅霖 梅暑 葉 面
香酒 茶毛酒 桃花
酒 桃花坡 空生殖
霧林 拾枯 伐木
蘇枝 桃花馬
桃簟 桃花粥
蓼茶義 嚼氷 香 葉
合蘭 焼香 空生殖
より

（朱）「ゆふく」 木と竹と（朱）「竹」 竿（朱）「竿」

頭

竹と竿よりは木ハ大きく

人倫と人倫の

遠き近

二句三隣

山巓と山巓と

竹とのごとく

（朱）「山」と山と

（朱）「山」と山ハ

（朱）「水」

海と江湖とのごとく

（朱）「水」と水と

（朱）「遠」と遠きを

（朱）「遠」を

（朱）「近」を

（朱）「近」と近きを

（朱）「近」と近きを

秋冬と夜冬

（朱）「夜」と夜

（朱）「夜」と夜

（朱）「夜」と夜

句数之事

春旅連ネの　夏冬同ク

恋雑　神祇　釈教

旅行　述懐　山類

水邊　居所　私ニ

生類　降物

降物　人倫　衣類

以上連歌の

名所　人名　如山之数二句接也

十句之内禁制之

物　以上連歌

不祥字

人名　如山之数

一座ニ一句の物ハ和漢ともニ

出ル共不苦

二句の物ハ和漢ともニ

苑二本宛ニ

地ハ和漢ともニ

和漢ともニ有ヘシ

百韻ニハ漢又十句

仮名ハ漢ニ多シ

聯句ニ体用乃ち仮名ニ

有ヘシ

和漢ニ半句ニ

自余景

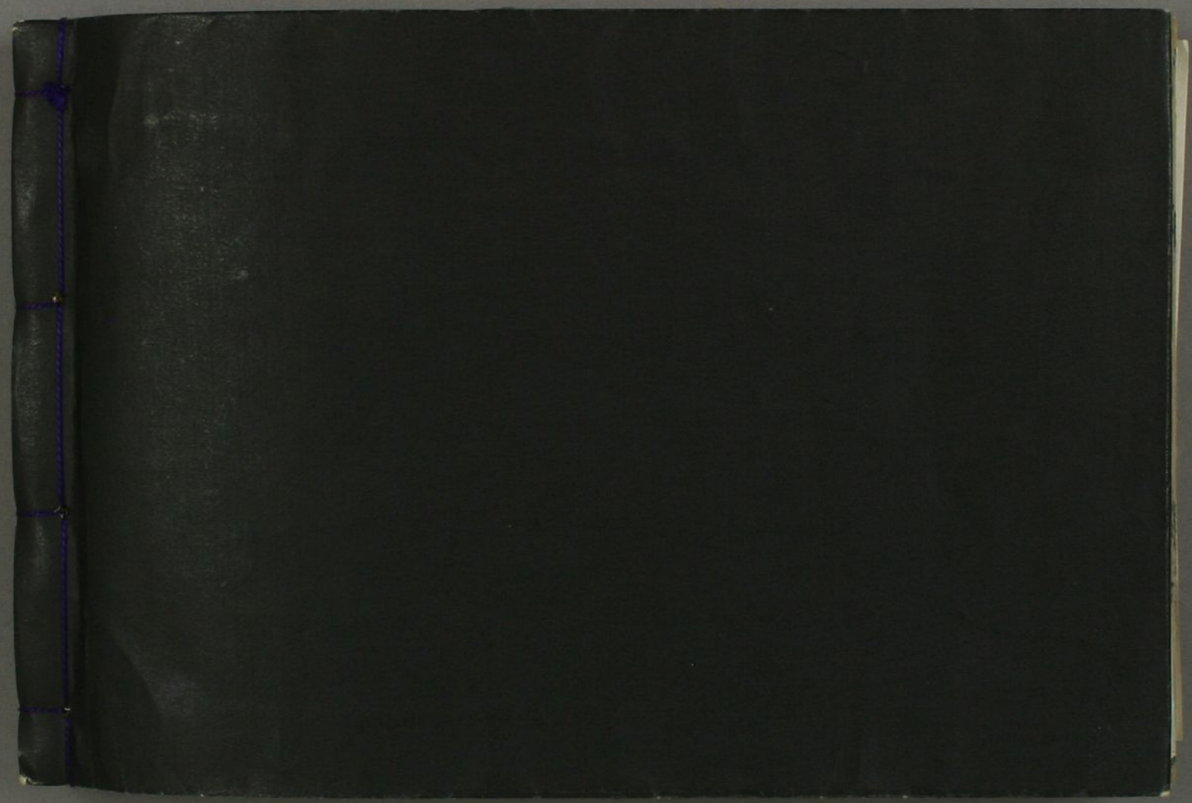
奥のすみに其後
巴亮は書を書き蔵
うつく趣きうつ度と
あひまうこ
うこ
をいうこ
又源江
年数迄
霧う曇を
流布す
本面

南山ヒ

以無言教之他意著
兩奧書莊之不急
敬　　穀覽御感不
斜方寫圖之任
勅定濃筆著也
慶長三年
二条親王宣性

此書寫之永題并
校訖　勅筆下再
大覺寺殿二条親王御
奧書也一覽之次
上人傳不足記之已
慶長二年
非雙門上旬
法眼紹也 下判

此一冊　林
し上
勅定ゟ
まゝもの
天ゟ
ゟ免許
御り
敵道寺梅
行者後
奥書
法弁
いし
晩景
おゐて
言
みきう
いて
廿言
留め
慶長八年
末食奥山上人意真　郷
下　九十二　判

女子吉祥寿宝之下

蒙古二条通菱屋町
二条通菱屋町
材木座